

例 言

- 1 本書は、平成2年度上原・猿久保線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 佐久建設事務所
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会
- 4 発掘調査所在地籍及び面積
大ふけ遺跡 長野県佐久市大字鳴瀬地籍 800m²
- 5 調査期間
平成2年5月29日～6月18日・6月19日～平成3年3月29日
- 6 事務局及び調査団の構成
(事務局) 佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター
教 育 長 大井季夫 教育次長 小池八郎
開発公社事務局長 須江吉介 課長兼所長 相澤幸男
管 理 係 桜井牧子(係長)・東城公人・田島清巳(嘱託)・関口美咲(臨職)
埋蔵文化財係 相澤幸男(係長兼務)・高村博文・林幸彦・三石宗一・須藤隆司・
小山岳夫・小林真寿・羽毛田卓也・翠川泰弘・竹原学・助川朋広

(調査団)
団 長 黒岩忠男(佐久考古学会副会長)
副 団 長 白倉盛男(佐久考古学会副会長)
副 団 長 藤沢平治(佐久市文化財審議委員)
調査担当者 高村博文・林 幸彦
調 査 主 任 佐々木宗昭
調 査 員 大井今朝太
調査補助員 羽毛田香里・遠藤しづか・並木ことみ・星野良子・香山優子
協 力 者 堀籠 因・長岡喜代人
- 7 本書の編集・執筆は第三章第4節表採遺物を佐々木が、その他はすべて高村が行った。
- 8 本書及び出土遺物等の全資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

目 次

例 言・目 次

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機	1
第 2 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の環境と基本土層	2
第 1 節 遺跡の環境	2
第 2 節 基本土層	5
第 III 章 遺構と遺物	9
第 1 節 検出遺構遺物の概要	9
第 2 節 周溝墓	9
第 3 節 土坑および溝状遺構	17
第 4 節 表採遺物	18
第 IV 章 調査のまとめ	20
参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

第 1 図 大ふけ遺跡の位置	1	第 8 図 円形周溝墓・方形周溝墓実測図	11
第 2 図 周辺遺跡分布図	4	第 9 図 方形周溝墓出土遺物分布図	13
第 3 図 基本土層模式図	5	第 10 図 方形周溝墓出土土器実測図〈1〉	14
第 4 図 大ふけ遺跡発掘区設定図	7	第 11 図 方形周溝墓出土土器実測図〈2〉	15
第 5 図 大ふけ遺跡遺構全体図	8	第 12 図 第 3 号土坑実測図	17
第 6 図 第 1 号土坑実測図	10	第 13 図 第 1 号溝状遺構実測図	18
第 7 図 第 2 号土坑実測図	10	第 14 図 表採石器実測図	18

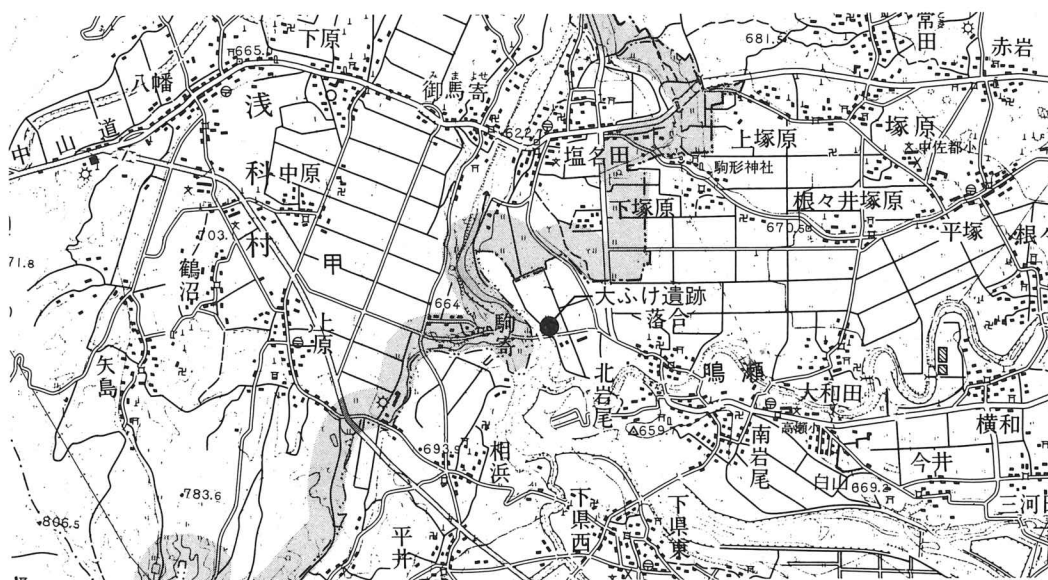
第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

大ふけ遺跡は、佐久市の北西部、浅科村界に存在する。北流する千曲川の右岸、第 1 河岸段丘上に位置し、遺跡の直下に流路を北東から北西に変化する千曲川が一望でき、標高637m付近を測る。

昭和50年には、東方に隣接する細田遺跡が県営圃場整備事業に先立って発掘調査され、周溝墓(?)、土坑などが検出されている。今回、佐久建設事務所による上原・猿久保線県単道路改良事業が計画され遺跡の保護措置が必要となった。平成元年に佐久建設事務所と佐久市教育委員会との協議の結果、試掘調査を実施し、その結果を待って再協議することとなった。

試掘調査は、平成2年5月9日～11日にわたって実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝墓と考えられる遺構2基と溝状遺構等が検出された。そこで、5月22日に長野県文化課・佐久建設事務所・佐久市教育委員会の三者により保護協議を行い、記録保存することとなった。



第 1 図 大ふけ遺跡の位置 (1 : 50,000)

第2節 調査日誌

- 平成2年5月29日 調査区を重機により表土除去を開始する。テント設営・機材の搬入を行う。
- 6月1日～6月4日 遺構検出作業を行う。
- 6月5日～6月18日 遺構の掘り下げ・精査、実測、写真撮影作業を行い、テント・機材の撤収をし、道路の復旧を終了する。すべての現場作業を終了する。
- 6月19日～平成3年3月29日 室内において報告書作成作業を行い全調査を完了する。

第II章 遺跡の環境と基本土層

第1節 遺跡の環境

大ふけ遺跡は、佐久市高瀬地区の最西端、千曲川に沿った河岸段丘上、水田、一部畑地地帯に立地している。佐久市内を杉の木付近から西流して来た千曲川が相浜断崖に突き当たり、方向を変えて北流し鳴瀬で湯川と合流した、北へ約300mの千曲右岸に遺跡は存在する。

本遺跡の東部には、佐久市塚原を中心とした標高680m内外のほぼ平坦な段丘面（第二段丘）があり、この段丘西端を千曲川の浸食による高さ約10mの崖を下って現千曲川流路に至るまで、ほぼ平坦面を形成している（第一段丘）。この第一段丘は、最初第二段丘が千曲川の浸食によって切り開かれた旧河床面に再堆積された堆積面で、千曲川は更に西に再浸食して現河流路となって残されたものである。多少西に極めて緩やかな傾斜をしており、高い部分が僅かに一部、畑地となっているが、大部分は水田として耕作されており、本遺跡は細田遺跡の西方約200mの道路部分と畑地で、第一段丘の千曲川東岸直上に当たる。

第二段丘面を形成している地質は、北は常田、東は現在の小海線路付近まで、南は湯川の線に囲まれた地域に分布する浅間山第一次黒斑火山の大噴出に起因する「塚原泥流」によって構成されている。この塚原泥流は火山灰・火山礫・火山岩塊・巨大な岩塊を中心として、本段丘面に火山裾野の特殊な地形といわれる「流れ山」が数十ヶ所各地に散在し、田園風景の中に塚状に残っており、その一部は古墳にも利用され、平塚・塚原等の地名の起源にも関係している。

第一段丘は旧千曲川河床の堆積物で、昭和50年度の細田遺跡発掘調査に際して、表土下から掘

第1表 周辺遺跡一覧表

佐久市 分調No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	
76	大ふけ遺跡	鳴瀬字大ふけ	段丘	○	○	○				平成2年度発掘調査
77	細田遺跡	鳴瀬字細田	"	○	○	○				昭和50年度発掘調査
78	熊の堂遺跡	鳴瀬字熊の堂	"	○	○	○				
202	粕田遺跡	鳴瀬字粕田	"					○		
203	曇畑遺跡	鳴瀬字曇畑他	"		○	○				
204	落合居屋敷遺跡	鳴瀬字居屋敷	"		○	○	○	○		
205	鳴瀬宮の前遺跡	鳴瀬字宮の前他	"		○	○	○	○		
206	岩尾城跡	鳴瀬字城跡・宮の前	"						○	県指定史跡
207	下北古屋遺跡	鳴瀬字下北古屋・北田	"					○	○	

り出された大小の礫は完全に水流によって円磨された河床礫ばかりであった。この河床礫の岩質は長石の斑晶の多い黒色多孔質の安山岩で、確実に浅間火山系と推定できるものばかりであった。従って細田遺跡付近は湯川が千曲川と合流した直後の地点で、湯川の影響下による堆積物であると言い得る。<1984 白倉の原稿を本遺跡用に改正した>

大ふけ遺跡付近には、同一の第一段丘面上に細田遺跡(77)、粕田遺跡(202)、曇畑遺跡(203)が存在し、昭和50年度、発掘調査を実施した細田遺跡からは、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭と考えられる周溝墓(?)の一部が検出されている。第二段丘上には縄文時代から古墳時代の遺物が採集されている熊の堂遺跡が存在し、また、千曲川の断崖を利山して築造した県指定史跡岩尾城跡が本遺跡の南方に位置している。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:8,000)

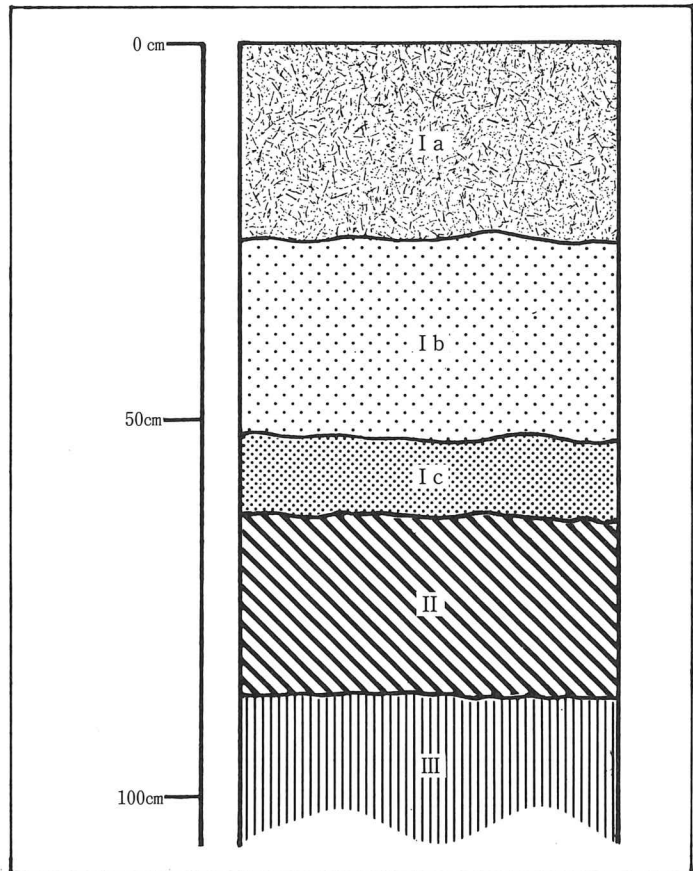
第2節 基本土層

大ふけ遺跡は、千曲川の右岸直上の第一段丘上に位置し、河川敷からの比較差は約16mを測り、北流する千曲川が一望に眺望でき、景観がすばらしい。また、南方約300m上流で、湯川と千曲川が合流する地点となり「落合」という地名が残っている。遺跡の現状は、道路と田・畑となっており、北方に向かって緩やかに傾斜しているものの、ほとんど平坦に感じられる。

今日、道路改良となった道路の両脇には、農業用水が一直線に道に沿って付設されており、調査期間、水田に水が必要であるとともに隣接した菊畑にも用水を取り入れる必要があるとのことで、この農業用水を残して調査せざるを得なかった。

遺跡の基本土層は、第3図に示したように、約60cmまでの第I a・I b・I c土層は、道路を舗装した際の埋め土で、その下層に黒褐色土層（第II層）が存在する。

方形周溝墓の用水沿いの土層断面を確認すると、この第II層より遺構の落込みが観察できず、



第3図 基本土層模式図

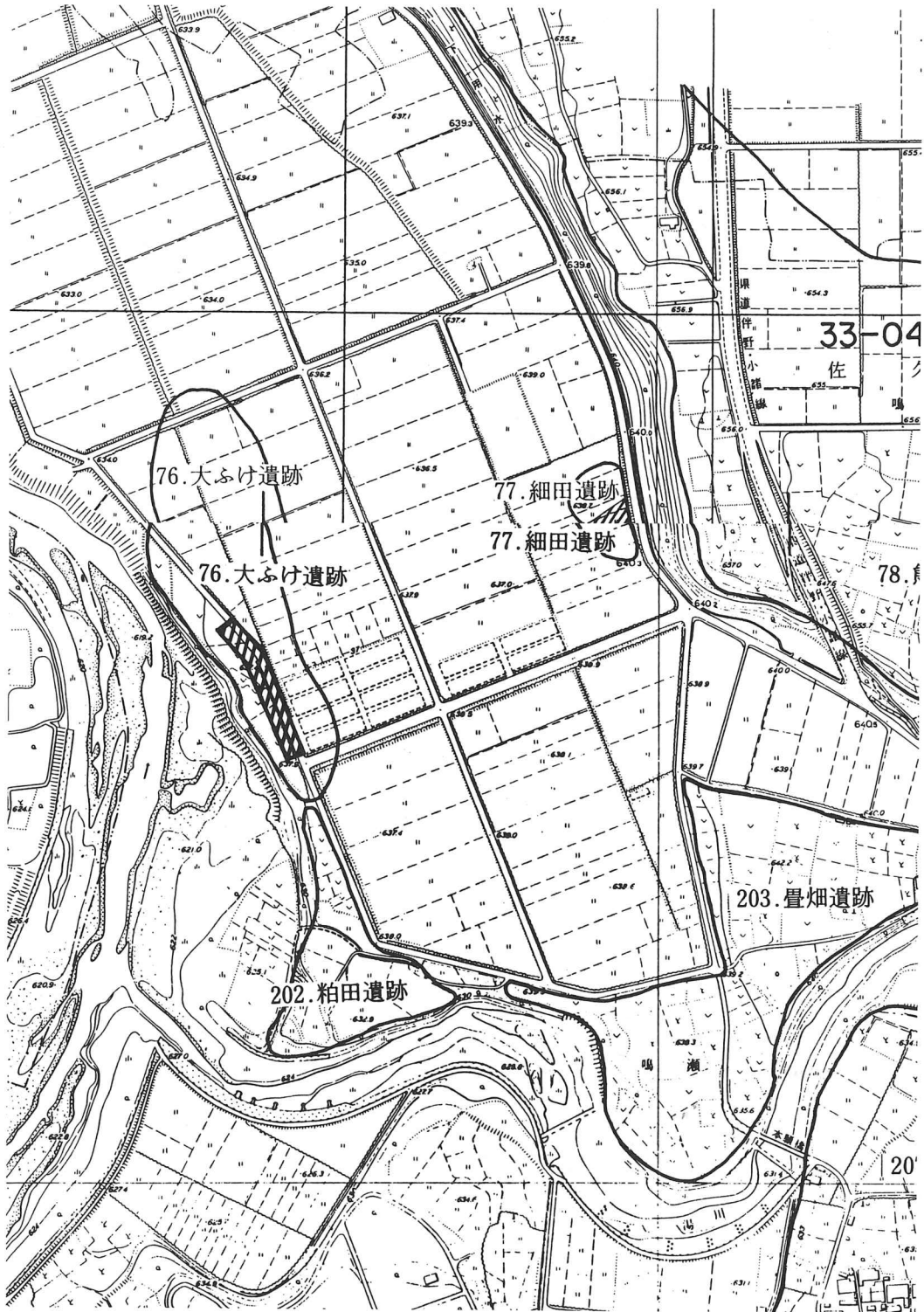
基本土層

第I a層	灰黄褐色土層 (10YR5/2)	埋め土
第I b層	にぶい黄橙色土層 (10YR6/4)	埋め土
第I c層	灰黄褐色土層 (10YR5/2)	埋め土
第II層	黒褐色土層 (10YR3/1)	ローム粒子が微量に混入し、小礫 (0.5~1cm大) を含む。
第III層	黄色砂質ローム層	

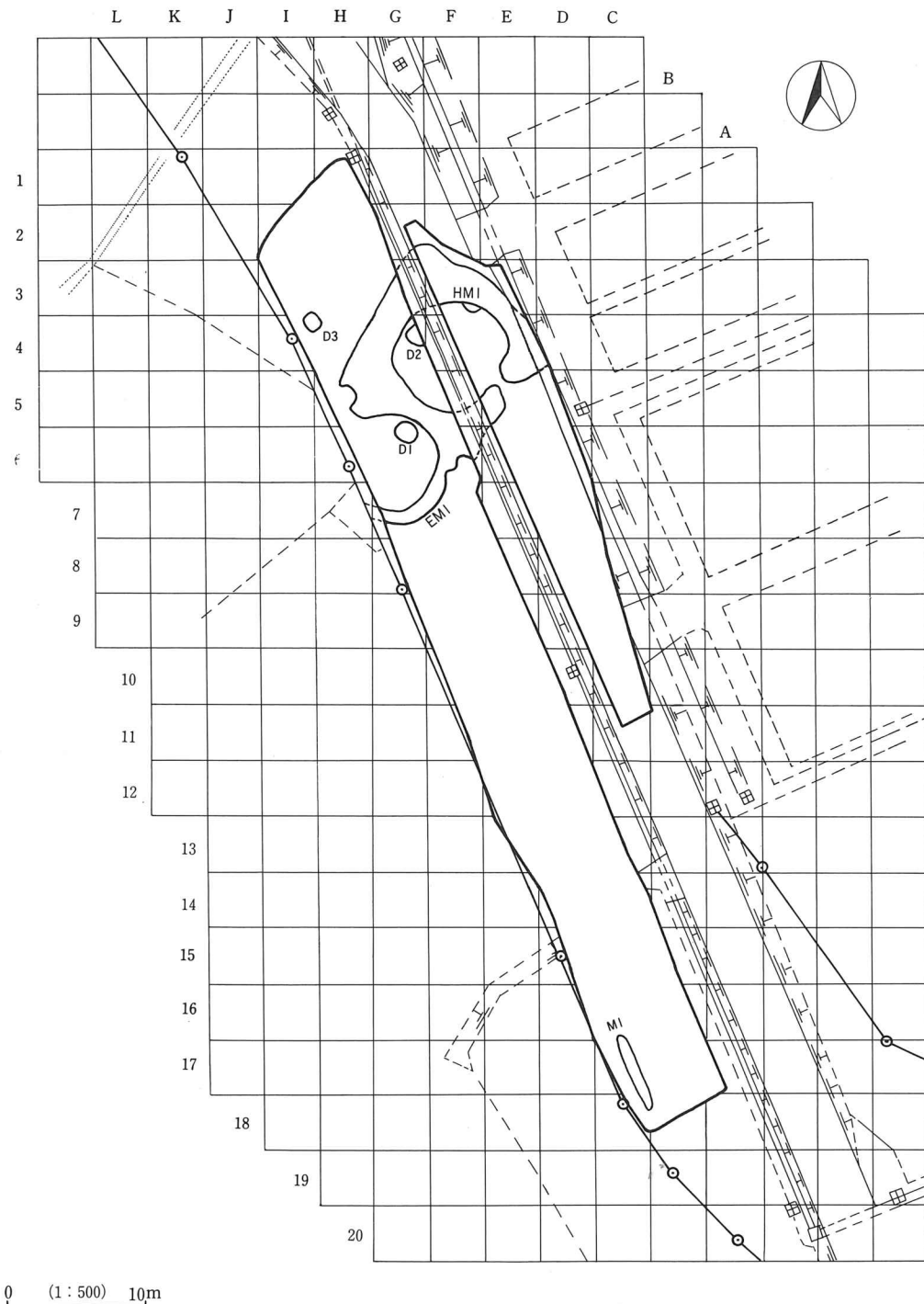
平面プラン検出の際も、すべての遺構について、黄色砂質ローム（第Ⅲ層）上面まで掘り下げて確認することができた。

調査区の南側部分は礫のない砂質ローム層であったが、北側は千曲川あるいは湯川の旧河床礫と考えられる礫が多量に検出された。

引用参考文献 『細田』1984 佐久市教育委員会



第4図 大ふけ遺跡発掘区設定図 (1:5,000)



第5図 大ふけ遺跡遺構全体図 (1:500)

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 検出遺構・遺物の概要

検出遺構

円形周溝墓	1基	弥生時代後期～古墳時代前期
方形周溝墓	1基	弥生時代後期～古墳時代前期
土坑	3基	時代不明
溝状遺構	1基	時代不明

出土遺物

土器	弥生時代後期～古墳時代前期土器……壺・坏等 土師器・須恵器・陶磁器	
石器	石播鉢（中世）	
鉄器	角釘（中世）	

第2節 周溝墓

1) 円形周溝墓（第8図、図版四）

本遺跡からは周溝墓が2基検出された。2基の周溝墓は重複して存在し、一本の周溝を共有する形態をとる。平面プラン検出の際の確認と土層断面の観察によって新旧関係を明らかにすることはできなかった。

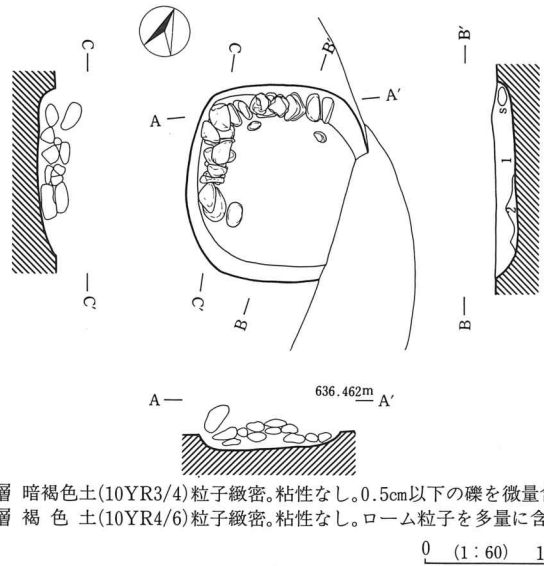
遺跡の西方に存在する周溝墓の平面形態が円形に近いため、円形周溝墓と命名した。円形周溝墓は、F・G・H-5～7グリッド内に位置し、規模・形態は外径約475m、内径約350mの円形を呈し、西側が調査区域外になるため完掘はできなかったが、西北に開口部を持つものである。周溝の幅は45cm、深さは15cmほどのU字形を呈し、北東部分の周溝は、重複する方形周溝墓と周溝を共有している。

出土遺物は、赤色塗彩された壺胴部小片、一片と不明土器小片、一片だけであった。

周溝内、北東部分には第1号土坑が存在する。土坑は一辺150cm内外の隅丸方形を呈し、北辺部と西辺部には2～3段の石組がみられ、深さ20cmの皿状の落ち込みである。

出土遺物は赤色塗彩の壺、口縁部小片が一片出土しているものの同伴関係に言及できない。

本土坑と円形周溝墓との関連を考えると、積極的な同時性を示す資料は少ないが、また、同時性を否定する積極的な資料もない。ただ、周溝内の平面的位置からの類推は危険であるが、円形周溝墓の主体部と考えることも可能である。

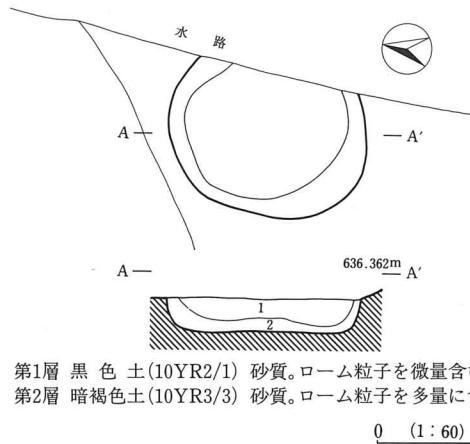


第6図 第1号土坑実測図

2) 方形周溝墓

遺構 (第8・9図、図版五)

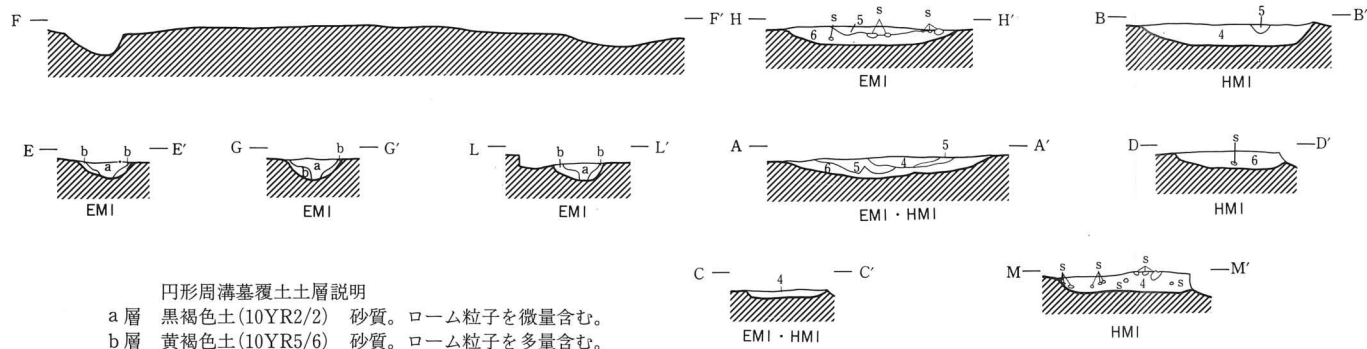
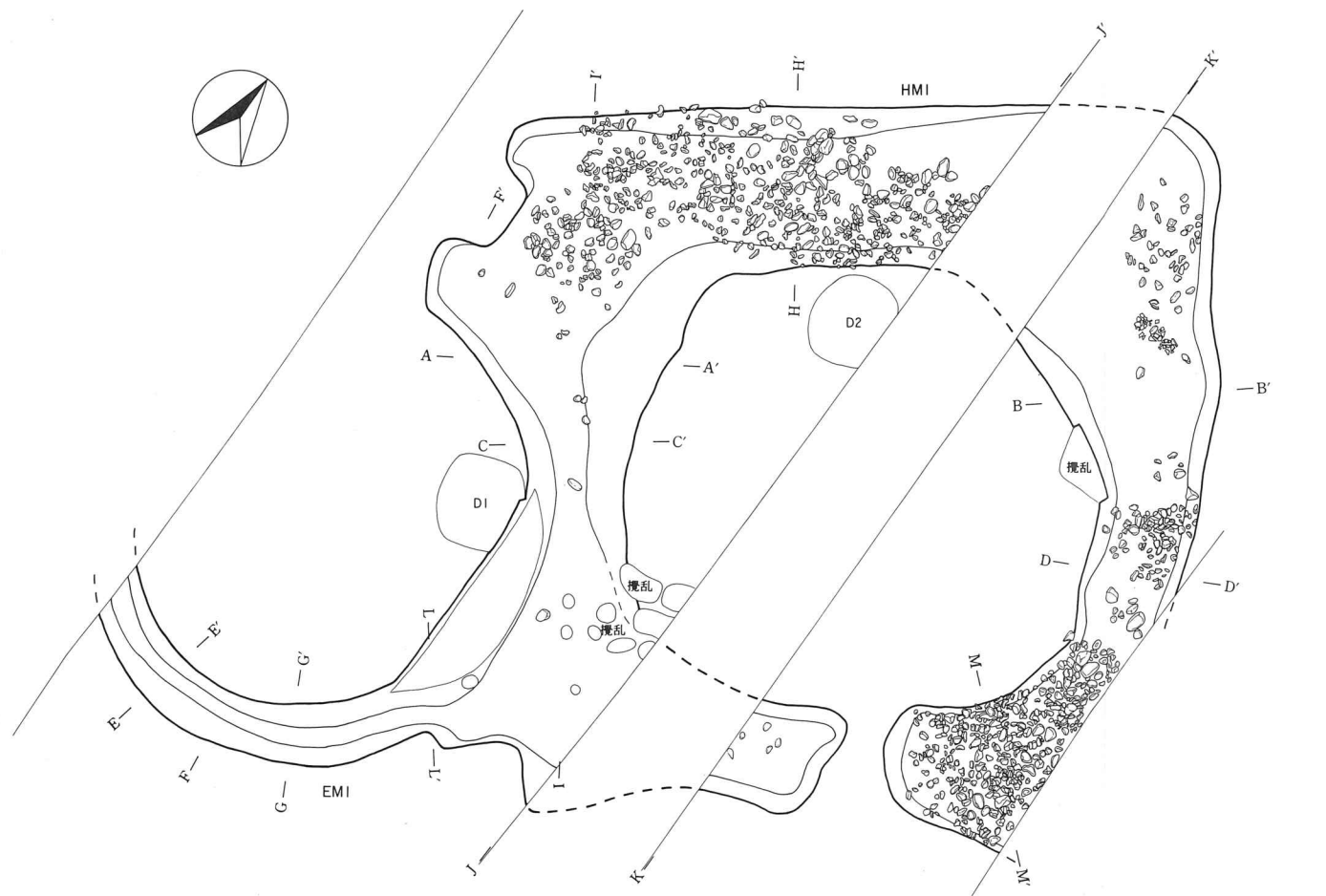
本遺構は円形周溝墓の項で述べたように、周溝の西辺部を円形周溝墓と共有し、その東方に位置している。周溝の全容は南北に伸びる農業用水路とその東方に並行して走るもう一本の用水路部分については検出できなかったものの、ほぼ確認できた。周溝の外周が方形を呈していることから方形周溝墓と命名した。



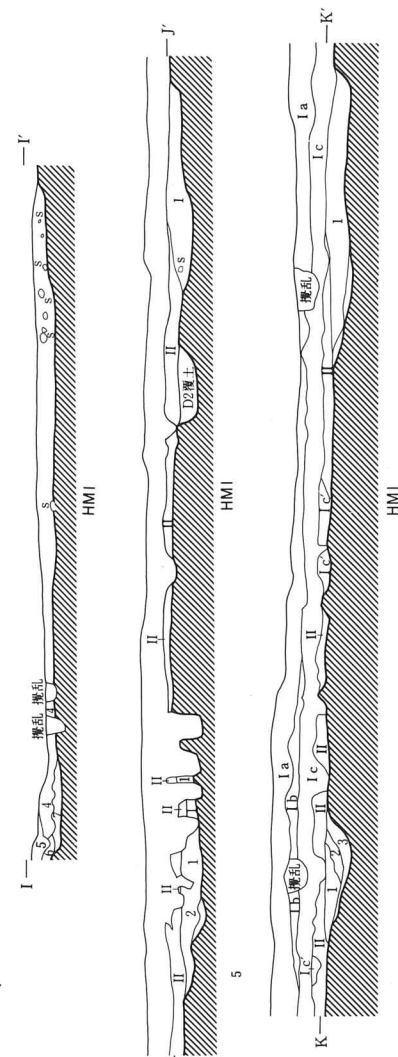
第7図 第2号土坑実測図

本周溝墓は全体層序第Ⅲ層を掘り込んで構築されており、D・E・F・G・H-2～6グリッド内に位置し、外周は方形で南東部分に開口部を持ち内周は北辺に外周と並行した直線部分が短く見られるものの、方形というより不正楕円形に近い。

規模については、外周の北辺584cm、東辺560cm、西辺620cm、開口部、南東辺180cm、南西辺245cmを測る。開口部を正面と仮定すれば、縦580cm、横565cmを測り、開口部、最小幅約34cmを測る。外周の形態は南西・南東隅は水路のため不明であるが、おそらく角が直角に近いやや奥行きの方



円形周溝墓覆土土層説明
 a層 黒褐色土(10YR2/2) 砂質。ローム粒子を微量含む。
 b層 黄褐色土(10YR5/6) 砂質。ローム粒子を多量含む。

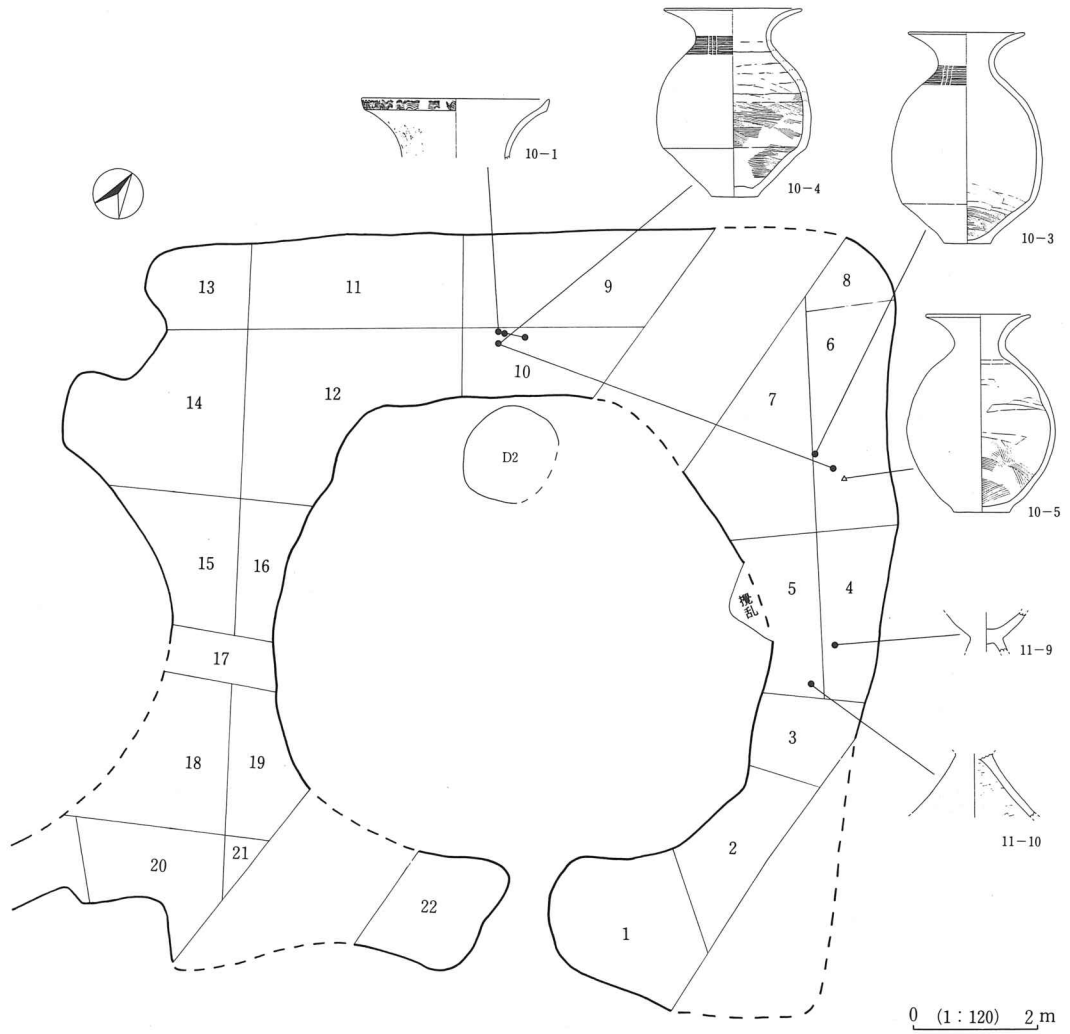


全体層序
 第I a層 灰黄褐色土(10YR5/2) 埋め土。
 第I b層 ぶい黄褐色土(10YR6/4) 埋め土。小礫が多量に混入。
 第I c層 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム粒子が微量に混入し、小礫(0.5~1cm大)を含む。
 第I c'層 褐灰色土(10YR5/1) 小礫(0.5cm大)を少量含む。
 第II層 黒褐色土(10YR3/1) 小礫(0.5~1cm大)、ローム粒子を微量含む。
 第III層 黄色砂質ローム層。

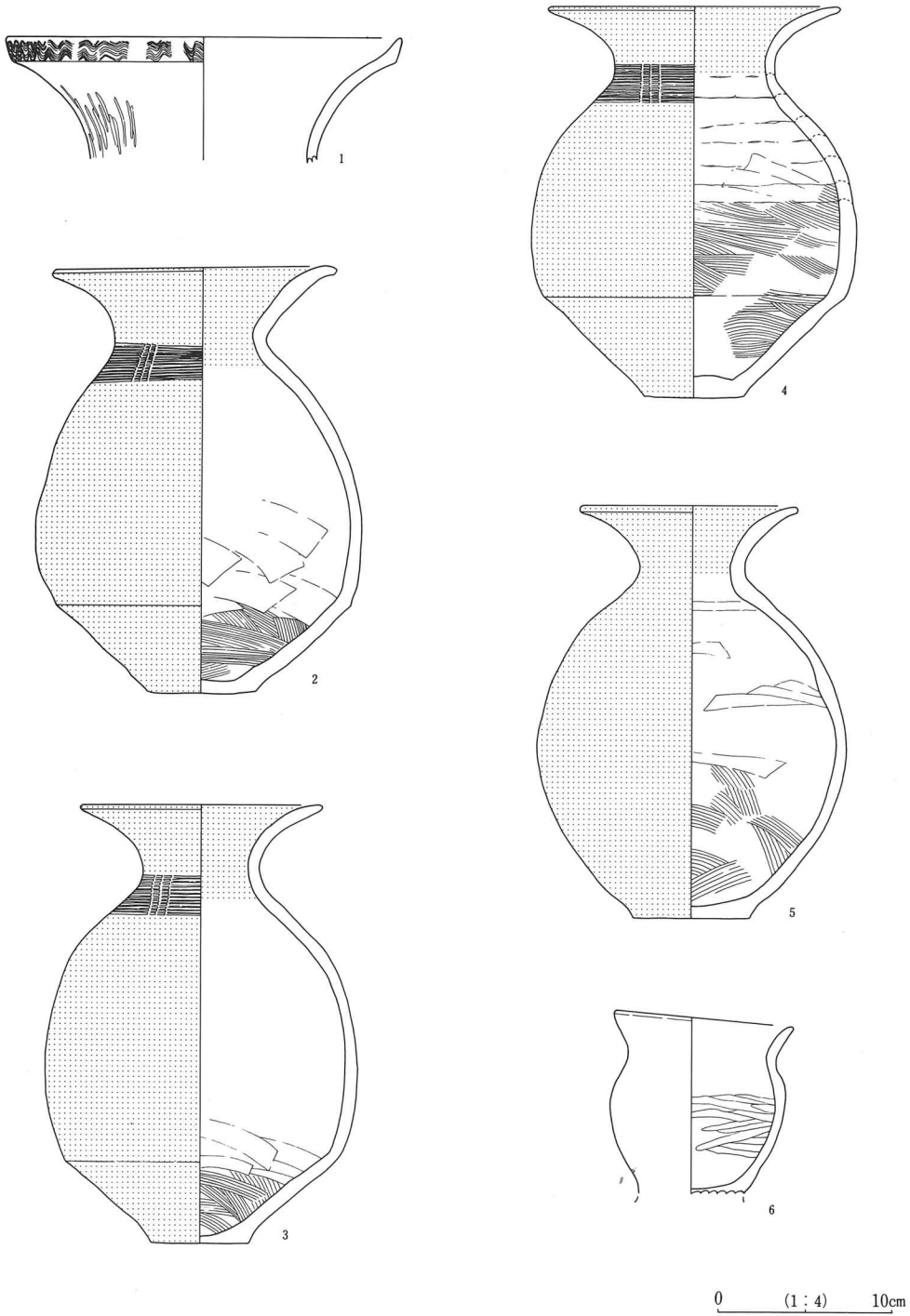
方形周溝墓土層説明
 第1層 黒色土(10YR1.7/1) ローム粒子、及び小礫(0.5~1.0cm大)を微量含む。
 第2層 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子を含む。
 第3層 ぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒子を多量、小礫を少量含む。
 第4層 黒色土(10YR1.7/1) 砂質。小礫を少量含む。
 第5層 黒褐色土(10YR2/3) 砂質。礫(1.0~3.0cm大)を含む。
 第6層 暗褐色土(10YR3/3) 砂質。小礫(0.5cm大)を微量含む。
 第7層 褐色土(10YR4/4) 砂質。礫(2.0~3.0cm大)を含む。

0 (1:120) 4m

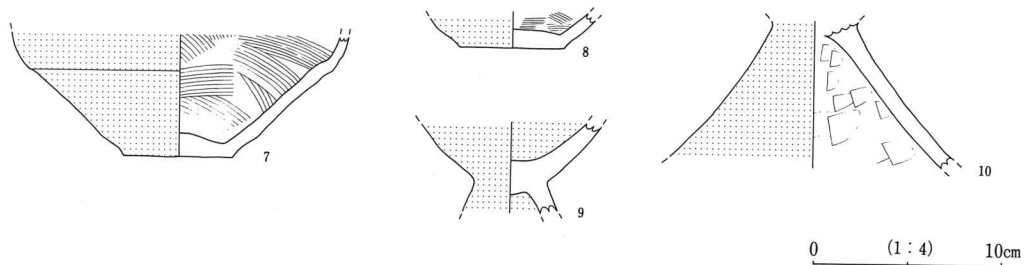
第8図 円形周溝墓・方形周溝墓実測図



第9图 方形周沟墓出土遗物分布图



第10図 方形周溝墓出土土器実測図〈1〉



第11図 方形周溝墓出土土器実測図<2>

い方形を呈する。内周についても開口部を正面と仮定すれば、横内径が約400cm、縦内径が約370cmの外周とは逆の奥行きがやや短い不正楕円形を呈している。

周溝の幅は、東・西辺中央付近が細くなり80~85cmを測り、北辺中央付近は130cmを測る。掘り込みは深さ約20cmで、凹レンズ状か皿状を呈す。

覆土は1層から3層に分層でき、自然堆積の可能性が高い。また、北辺及び東辺の周溝内に多数の河床礫が検出されたが、地質的にみて人為的所産より自然的なものの可能性が高い。

周溝内、北辺部のほぼ中央に周溝と近接して第2号土坑が存在する。土坑の東部は用水路により調査不可能であったが、形態の全容はほぼ推測できる。規模・形態については、長径164cm、短径136cmの楕円形を呈し、深さ約26cmの逆台形状の落ち込みである。

土層については、表土からの土層断面がJ-J'で観察できたが、全体層序II層を切って落ち込んでいるようにもみられ、その部分の確認は非常に困難であった。

出土遺物は、赤色塗彩壺と無彩の壺胴部小片が二片出土したのみである。

本土坑と方形周溝墓との関連は、明確に言及できず、前述した第1号土坑と円形周溝墓との関連以上ではない。

遺物 (第10・11図、図版七)

本周溝墓からは、弥生土器、須恵器、土師器が出土している。その内、図示し得たのは弥生土器10点であり、本址に共伴すると考えられる器種は、赤彩壺・無彩壺・高坏・坏・小形甕がある。

図示できなかったが、出土土器の大部分を占めるのは、壺形態の土器である。壺には赤彩壺と無彩壺があるが、出土範囲・量とも圧倒的に多く、煮沸形態の大形甕の出土はみられない。

第2表 方形周溝墓出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
10-1	壺	(24.4)	口縁部は頸部から外反し、上端で受口状に立ち上がる。	内) 外面とも器面が荒れているが、受口状に立ち上がる部分の外面に櫛描波状文が施され、他の部分は内・外面ともヘラミガキがなされている。	残存率 口縁から頸部1/2 回転実測 No.2・5・6・10区 長石・石英・小礫含む 色調7.5YR7/4(にぶい橙色)
10-2	壺	口 16.2 頸 8.8 胴 18.6 底 6.1 全高 24.3	最大径を胴部下半にもち、箱清水土器特有の胴下部に稜を持ち直線的に底部に至る。	内) 頸部以上は横位のヘラミガキ赤色塗彩、胴部はヘラナデ、胴下部はハケメ調整がなされる。 外) ヘラミガキ、外面の頸部、底面以外は赤色塗彩が施されている。 文) 頸部に14本一組の櫛描簾状文(3連止め7ヶ所・右廻り)が施されている。	残存率 4/5残存 完全実測 No.10、6・7区 白色砂粒含む 色調7.5YR7/4(にぶい橙色)
10-3	壺	口 13.9 頸 6.7 胴 17.9 底 5.7 全高 25.0	最大径を胴部中央付近に有し、箱清水土器特有の胴下部に稜を持つ。ややゆがんでいる。	内) 頸部以上は横位のヘラミガキ赤色塗彩がなされ、胴部はナデ、胴下部はハケメ調整がなされている。 外) 頸部文様帯以外、ヘラミガキ、赤色塗彩が施され、底面にも赤色の痕跡がみられる。 文) 頸部に12本一組の櫛描簾状文(3連止め・右廻り)が施されている。	残存率 3/5残存 回転実測 No.10 色調 5YR6/3(にぶい橙色)
10-4	壺	口 16.6 頸 9.1 胴 18.5 底 5.7 全高 22.3	最大径を胴部中央付近に有し、箱清水土器特有の胴下部に稜を持つ。胴上半部から頸部にかけて、粘土紐が4条ほど観察できる。	内) 頸部以上は横位のヘラミガキ赤色塗彩がなされ、胴上部は雑なナデ、胴中央から下半はハケメ調整が施されている。 外) 頸部文様帯以外、ヘラミガキ、赤色塗彩がなされ、底面にも赤色の痕跡がみられる。 文) 頸部に14本一組の櫛描簾状文(3連止め・右廻り)が施されている。	残存率 4/5残存 完全実測 No.2・7・11、7区 色調7.5YR7/4(にぶい橙色)
10-5	壺	口 12.2 頸 5.9 胴 17.7 底 6.8 全高 23.6	最大径を胴部中央付近に有し、箱清水土器特有の稜を胴下部にもたない。また、頸部も無文で細くしまる。	内) 頸部以上は横位のヘラミガキ赤色塗彩がなされ、胴部の大部分はナデ調整、胴下半にハケメがみられる。 外) 全面にヘラミガキ、赤色塗彩が施され、底面においても、赤色の痕跡が認められる。	残存率 3/5残存 完全実測 No.12 色調 10YR7/3 (にぶい黄橙色)
10-6	小形台 付 甕	口 10.3 胴 8.5 底 10.0 底 6.0 全高 <10>	最大径が口縁部と胴部最大径とはほぼ同じで、底部の欠損部分の観察から小形台付甕の可能性が高い。	内) 口縁部ヨコナデ、他はナデ調整。 外) 口縁部ヨコナデ、他は器面が荒れていて観察不能。 文) 文様は施されていない可能性が高い。	残存率 3/5残存 完全実測 3区 色調 10YR7/2 (にぶい黄橙色)
11-7	壺	底 6.0	箱清水特有の稜を有する。	内) 胴下部ハケメ 外) 赤色塗彩	残存率 底部 完全実測 No.2、10区 白色砂粒を含む 色調7.5YR7/12 (明褐灰色)
11-8	壺	底 5.8	平底	内面ハケメ、外面赤色塗彩	底部、完全実測、11区
11-9	高 杯	底 4.1	高杯接合部	内外面とも赤色塗彩	杯・脚接合部、4区
11-11	高 杯	—	高杯脚部、ラツバ状に広がる。	内面ヘラナデ、外面、赤色塗彩。	脚部 No.14

図示した出土遺物の分布(第9図参照)をみると、10-1の無彩壺は10区から、10-2の赤彩壺は6・7区から、10-3の赤彩壺は6・7区から、10-4の赤彩壺は6・7・10区から、10-5の赤彩壺は6区から、10-6の小形甕は3区から、11-7の赤彩壺は10区から、11-8の赤彩壺は11区から、11-9の高杯は4区から、11-10の高杯は5区から出土している。以上のように、図示できた土器でも赤彩壺が10点中6点を占める。

分布の偏りを出土破片により分析すると、赤彩壺が3・4・5・6・7・10・11・12区より出

土しており、22区から1片出土している。周溝の北辺部と東辺部に偏っている。無彩壺は6・7・10・11・12区より出土しており、周溝の東辺部隅と北辺部から出土している。高坏は4・5区から出土しており、周溝の東辺部中央に集中している。坏は3・4・5・7区より出土しており、周溝の東辺部に偏る。小形甕は4・5・6区から出土しており、周溝の東辺部北半に集中している。以上のことから、出土遺物のほとんどが周溝の北辺部と東辺部に偏り、西辺部、南辺部からは、ほとんど出土していないことがいえる。

図示した土器の成形・調整等は第2表土器観察表を参照していただきたい。その他、波状文がわずかに観察できる埴輪か須恵器片か不明の肉厚の破片が出土している。

また、本址からは、須恵器壺片とクロロ土師器坏片、中世と考えられる角釘が出土しているが、混入遺物であろう。

円形周溝墓と方形周溝墓の構築時期について、本来、新旧関係は土層観察により判断すべきであるが、調査の時点で前述したように確認不可能であった。

そこで、平面形態のあり方に注目すると、方形周溝墓が円形周溝墓の存在を意識して築造した形跡がみとれ、このことから、円形周溝墓構築後、方形周溝墓を築造したのではないかと推定でき、両基ともさほど大きな時間差を感じさせない。

所産期については、方形周溝墓の出土土器から佐久地方の土器型式では弥生時代後期に比定されるが、この時代の時期区分について、改めて第IV章調査のまとめで再述したい。

第3節 土坑及び溝状遺構

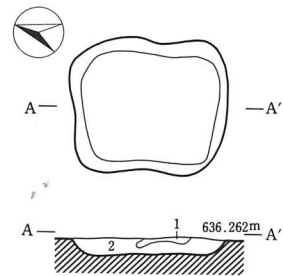
1) 土坑 (第12図、図版六)

本遺跡からは土坑が3基検出されている。このうち第1・2号土坑については、周溝墓との関連から前節で記述してある。

第3号土坑は、H・I-3・4グリッド内に位置し、全体層序第III層上面より検出された。規模・形態は長軸120cm、短軸110cmのほぼ方形に近い形態を呈しており、深さ12cmの皿状の落ち込みである。遺物の出土はなく、所産期及び性格については言及できない。

2) 溝状遺構 (第13図、図版六)

本遺跡から検出された溝状遺構は両端が収束しており、溝状

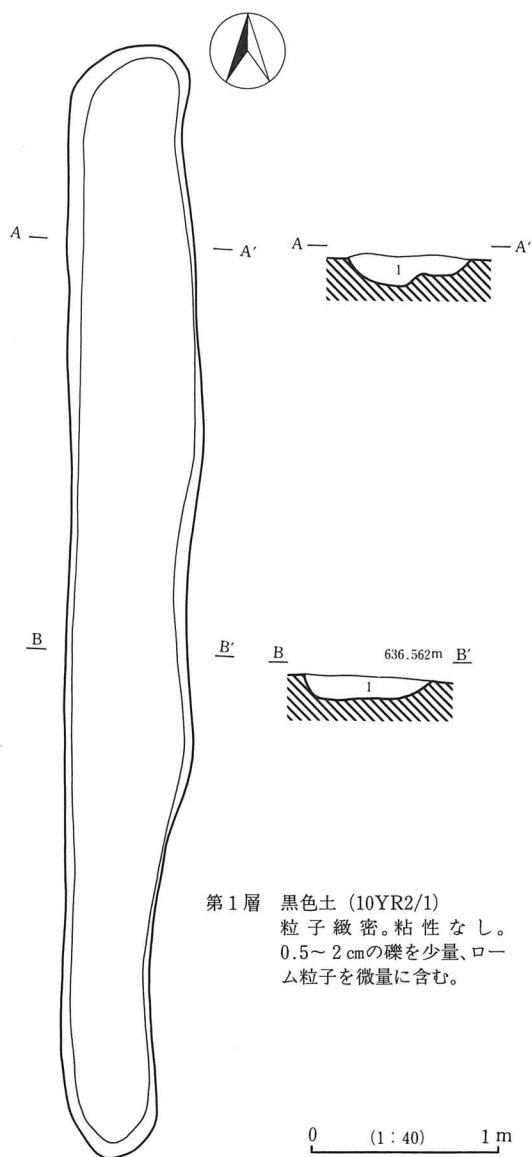


第1層 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質。小礫を多量に含む。

第2層 黒色土 (10YR1.7/4) 砂質。黄色砂粒を微量含む。

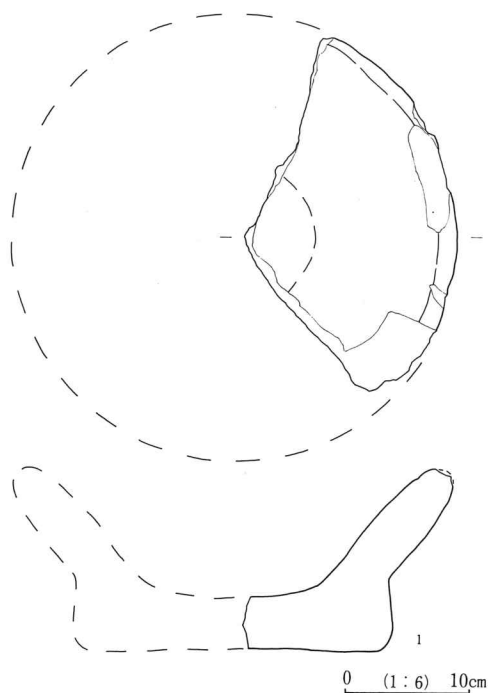
0 (1:60) 1m

第12図 第3号土坑実測図



第13図 第1号溝状遺構実測図

第1層 黒色土 (10YR2/1)
 粒子緻密。粘性なし。
 0.5~2cmの礫を少量、ロー
 ム粒子を微量に含む。



第14図 表採石器実測図

遺構という名称は不適切と思われるが、他に
 適当な名称がなかったので使用した。

溝状遺構はB・C-16~18グリッド内に位
 置し、全体層序第III層上面より検出された。

規模・形態は、長さ590cm、幅60cmの瓜状の
 南北に細長い形態を呈しており、深さ15cmの
 逆台形の掘り込みを持つ。

遺物は奈良時代~平安時代中葉までに多く
 みられる武蔵甕小片が1片出土したのみで、
 本址の所産期・性格については言及できない。

第4節 表採遺物

石播鉢 (第14図、図版七)

調査区に隣接した北側より石播鉢が表採された。

破片の残存形態は、約1/3であることが認められ、図上復原により直径34.5cm、高さ14.6cmであった。本遺物は台部を有しており、径は25.3cm、高さ5.5cmを測る。

すり面（内部使用面）の深さは約10.3cm、底部径は約12cmを測る。すり面全体に「摩擦痕」が認められ、使用度の濃さが窺われる。

本石播鉢の特徴は、すり面の底部径と、口縁部径との差が大きく、底部から口縁部が大きく外傾し、かつラッパ状に形成されている点である。このことは、粉碎化された製品を器からより出し易くするための機能的な工夫がなされていると言える。

石質は多孔質安山岩である。佐久地方の中世遺跡（遺構）から検出される石播鉢類の多くは当石材が使用されること、また、形態の特徴を踏まえると本遺物は中世の石播鉢である。

なお、残存片の特徴から片口を有するものであることが考えられる。

その他の表採遺物として土師器・須恵器・陶磁器片などが出土している。

(佐々木宗昭)

第IV章 調査のまとめ

今回、大ふけ遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、周溝墓2基、土坑3基、溝状遺構1基である。

以下、今回の調査において検出された2基の周溝墓の年代を中心にまとめを行っていきたい。

本遺跡で検出された2基の周溝墓は、溝を共有していることから、築造の年代差はあまりないものと考えられる。年代の検討は、方形周溝墓より出土し、図示した6個体の遺物より判断する。

土器編年をするうえで大形甕の変遷が最も方向性をもった規則的形態変化がみられるため、この大甕の形態変遷より、弥生時代終末から古墳時代前期と考えられる佐久地方の資料を単純に大ざっぱな時期区分について、かなり観念的ではあるが仮設定を試みた。(第3表参照)

A期……下小平遺跡Y4号住出土大形甕

外来系土器の受容がみられるものの、弥生土器が主体を占める。

B期……池畑遺跡H2号住出土大形甕

甕の文様施文に混乱がみられ、雑になる。外来系土器もあるものの弥生土器が主体を占める。壺に頸部文様の消失化が始まり、球胴型のものも現れる。

C期……瀧の峯2号墳出土大形甕

大形甕が球胴形を呈し、廉状文と波状文の組合せをもつ中形の甕がみられず、壺の頸部文様の消失が著しい。大形壺は赤色塗彩される。

瀧の峯2号墳の出現により、中央との関連が一段と強まったと推測でき佐久地方におけるひとつの画期となろう。

D期……下小平遺跡HM2号周溝出土大形甕

大形甕の調整がハケメとなり、文様を意識しなくなる。大形壺の赤色塗彩がなされない傾向となる。土器組成全体は弥生土器的な感じをうけず、佐久地方の食器文化の食器の変化としては大きな画期といえる。

E期……北西の久保遺跡第1次H16号住出土大形甕

ヘラケズリ調整による大形甕の発生をみるものの、須恵器を指向した坏の出現はみない。

F期……前田遺跡H16号住出土大形甕

須恵器を指向した坏の出現をみ、食器文化の大変画期である。

第3表 千曲川流域の大型甕の変遷

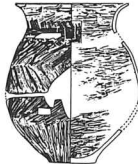
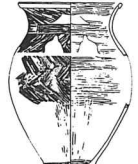
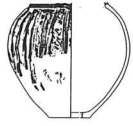
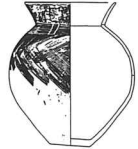

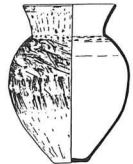
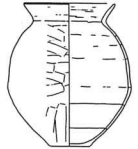
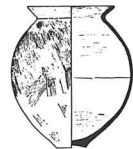

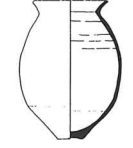
以上、弥生時代終末から古墳時代前期までを便宜的にA～F期に分類した。

A期は外来系土器の受容はみられるものの在地の弥生土器が主体を占め、B期には外部からの影響から在地の弥生土器に変化が始まり、C期に在地の弥生土器が解体し、D期には幾分弥生的土器が残存するものの新時代的土器様相となる。F期は、須恵器が出現し、須恵器を指向した坏の登場から食器文化の一大変画期といえる。

ここで、佐久地方の古墳時代がいつから始まるのかということが問題となるが、筆者が以前瀧の峯2号墳を立地のあり方、特に山丘頂に築かれる点を重視して佐久地方の初源的な古墳と位置づけたことがある(1989高村)。

瀧の峯2号墳が古墳か墳丘墓かはまだまだ検討の余地はあるものの瀧の峯2号墳の出現は、佐久地方の古墳時代の開始を考える上で重要な意味を持つもので、時期区分ではC期に当たる。C期は、在地の弥生土器解体期と考えられる。

本遺跡の方形周溝墓から出土した土器で大型甕はみられない

年	時代	時期	佐久地方	善光寺平
300—	弥生時代(後期)	A	 下小平Y4住	(+)
		B	 池畑Y2住	 御屋敷Y1住
		C	 瀧の峯2号墳	(+)
	古墳時代(前期)	D	 下小平HM2号周溝	 灰塚H1住
		E	 北西の久保第1次H16住	 城の内15住
		F	 前田H61住	 城の内12住
	古墳時代(中期)			

第4表 佐久地方の弥生時代終末から古墳時代前期の時期区分仮設試案

年	時代	時期	信濃			濃尾	畿内・大和	
			佐久地方	善光寺平	恒川			
300—	弥生時代	A	下小平Y1～5住	(+)	V	欠山庄内	纏向 2	
		B	池畑1・2住 (大ふけ1・2号周溝)	御屋敷Y1・2・4住	VI	元屋敷 (古)		布留 (O)
		C	瀧の峯2号墳 (久保田Y2・3住、HM1～3号周溝)	(+)	VII	元屋敷 (中)	布留 (古)	纏向 4
400—	古墳時代	D	下小平HM1・2号周溝 (宿上屋敷1・6号住)	灰塚H1住	↓	元屋敷 (新)	布留 (中)	
		E	北西の久保第1次H16住 (西裏10住、後沖1・4・11・16住、石附HM1号周溝)	城の内15住	K		布留 (新)	
		F	前田H61住 (御代田町)	城の内12住	X			TK73

が、壺が4個体出土しており、すべて赤色塗彩されていること、4個体中3個体が頸部に文様帯をもつこと、しかし、1個体は頸部に文様帯が消失しており胴部が球胴形を呈する。

久保田遺跡の周溝墓出土の壺は頸部文様帯が3個体中3個体消失しており、時期的には池畑遺跡1・2号住→本遺跡周溝墓→久保田遺跡周溝墓と考えられ、B期に位置づけられよう。

本遺跡の周溝墓は、1基が円形を呈しており、もう一基についても墳丘部分は円形を意識しているように感じられる。佐久地方の弥生時代から古墳時代の墳丘平面形の基本は方形が基調であり、今回の円形を意識した周溝墓の存在は何を意味するのだろうか。

弥生時代から古墳時代への時代の変動は人々の精神性にも様々な影響を与えたものと考えられる。佐久地方が大和(中央)政権に組み入れられる過程にはどのようなことが起こったのだろうか。今回、検出された周溝墓2基は、この激変する時代に残された文化の遺産である。

<引用参考文献>

- 佐久市教育委員会 (1981) 『下小平遺跡』
- 『長野県史 考古資料編 全一卷(二) 主要遺跡(北・東信)』(1982)
- 望月町教育委員会 (1983) 『後沖遺跡』
- 青木和明 (1984) 「長野県における周溝墓の変遷」『古墳出現期の地域性(第5回三県シンポジウム)』
- 小諸市教育委員会 (1984) 『久保田』
- 石野博信他 (1985) 『季刊考古学第10号-古墳の編年を総括する-』
- 加納俊介他 (1986) 『欠山式土器とその前後』愛知考古学談話会
- 飯田市教育委員会 (1986) 『恒川遺跡群』
- 佐久埋蔵文化財調査センター (1986) 『西裏・竹田峯』
- 佐久埋蔵文化財調査センター (1986) 『池畑・西御堂』
- 佐久埋蔵文化財調査センター (1986) 『瀧の峯古墳群』
- 石野博信他 (1987) 『古墳発生前後の古代日本-弥生から古墳へ-』大和書房
- 御代田町教育委員会 (1987) 『前田遺跡』
- 佐久埋蔵文化財調査センター (1987) 『宿上屋敷、下川原・光明寺』
- 佐久埋蔵文化財調査センター (1987) 『北西の久保第2次』
- 『長野県史 考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物』(1988)
- 高村博文 (1989) 「佐久地方の古代土器様相について」『佐久考古通信No.47・48』
- 青木一男 (1991) 「千曲川流域の周溝墓覚書」『長野県考古学会誌63』



1 大ふけ遺跡付近の航空写真



1 遺跡近景（北方より）



2 遺跡近景（南方より）



1 遺跡全景（北方より）



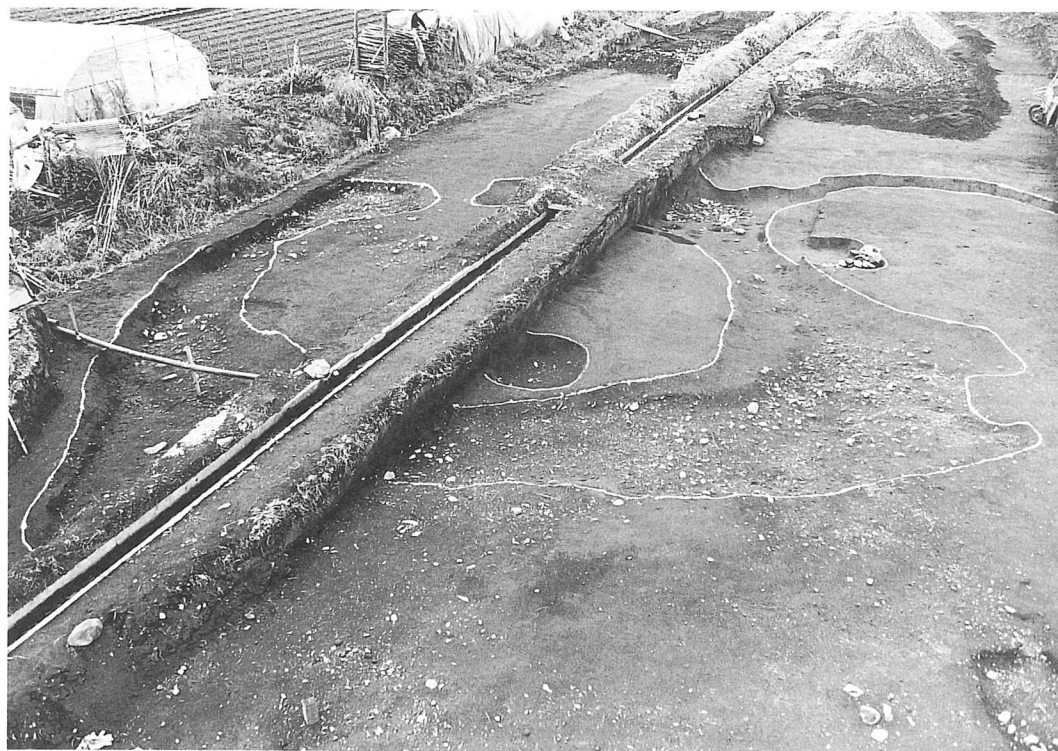
2 遺跡全景（南方より）



1 円形周溝墓（西方より）



2 円形周溝墓（北方より）



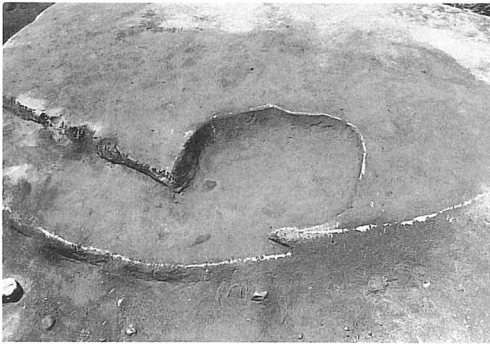
1 方形周溝墓（北方より）



2 方形周溝墓（東北より）



1 第1号土坑（東方より）



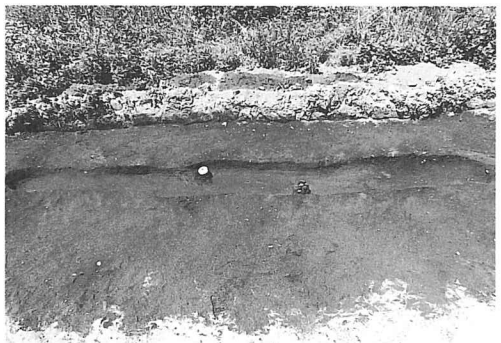
2 第1号土坑（東方より）



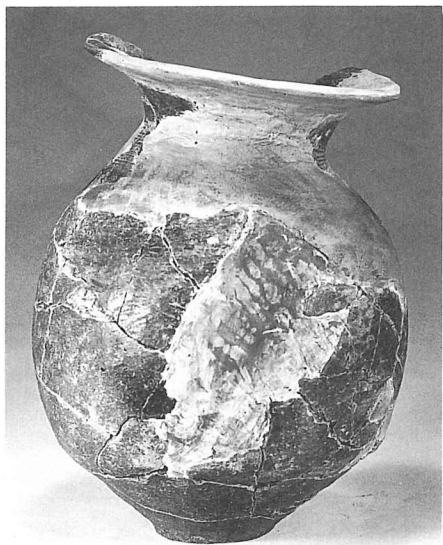
3 第2号土坑（西方より）



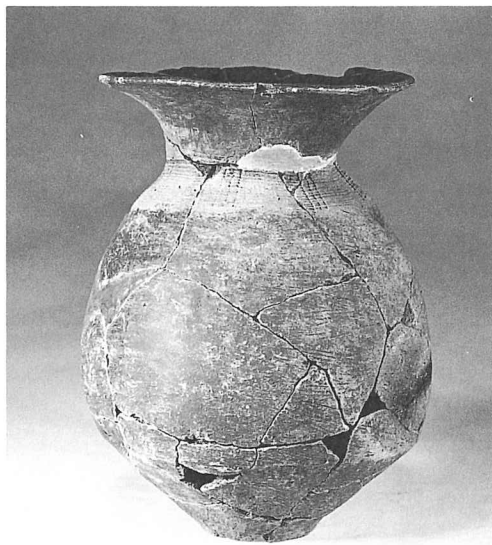
4 第3号土坑（東方より）



5 溝状遺構（東方より）



1 方形周溝墓出土土器 (10-2)



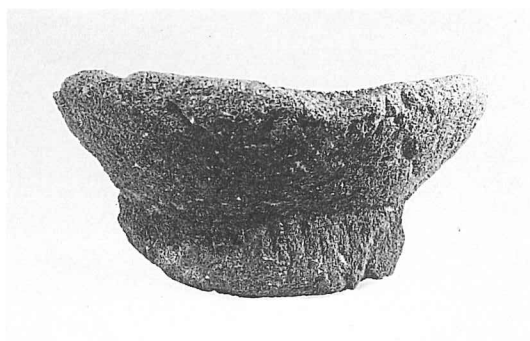
2 方形周溝墓出土土器 (10-3)



4 方形周溝墓出土土器 (10-5)



5 方形周溝墓出土土器 (10-6)



6 表採石器

佐久市埋蔵文化財調査報告書第1集 【金井城跡】
佐久市埋蔵文化財調査報告書第2集 【市内遺跡発掘調査報告書1990】
佐久市埋蔵文化財調査報告書第3集 【石附窯址群III】

長野県佐久市

佐久市埋蔵文化財調査報告書第4集

大ふけ遺跡発掘調査報告書

1991年3月

編集・発行者 佐久市教育委員会
